佐久市埋蔵文化財調査報告書　第251集

岩村田遺跡群

西八日町遺跡Ⅷ

長野県佐久市岩村田西八日町遺跡Ⅷ発掘調査報告書

2017.12

佐 久 市 教 育 委 員 会

例　言

1. 本書は、大和ハウス工業株式会社長野支店が行う宅地造成に伴う岩村田遺跡群西八日町遺跡Ⅷの発掘調査報告書である。
2. 調 査 原 因 者　　大和ハウス工業株式会社長野支店　支店長　斎藤 喜男
3. 調 査 主 体 者　　佐久市教育委員会
4. 遺跡名および所在地　　岩村田遺跡群　西八日町遺跡Ⅷ（ＩＮＣⅧ）
   佐久市岩村田2137-1、2145-1、2145-2、2145-2、2149-20
5. 調査期間及び面積　　平成29年４月10日～４月20日（現場発掘作業）
   平成29年４月21日～12月（報告書作成作業）
   ３０２㎡
6. 調 査 担 当 者　　冨沢一明
7. 本書の編集・執筆は冨沢が行った。
8. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1. 遺構の略記号は、住居址(H)・土坑(D)・掘立(F)である。
2. 挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988年版『新版　標準土色帖』に基づいた。
5. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

地山　焼土　掘方・赤彩
黒色処理・磨り面・粘土　施釉
須恵器

調査状況（西より）

目　次

例言・凡例・目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯
　1. 経過と立地
　2. 調査体制
　3. 調査日誌
　4. 遺構・遺物の概要
　5. 標準土層
　6. 調査の方法
第Ⅱ章　遺構と遺物
　1. 竪穴住居址
　2. 掘立柱建物址
　3. 調査の成果

遺物観察表
写真図版
抄　録

第１図　西八日町遺跡Ⅷ位置図(1：50000)

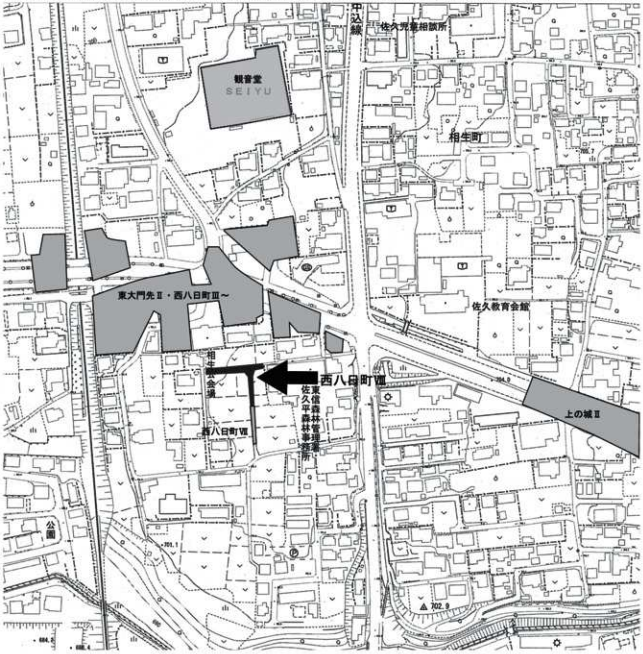
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1．経過と立地

西八日町遺跡Ⅷは、佐久市の岩村田に所在し、岩村田遺跡群の南端に位置する。遺跡の南を湯川が西に流れている。

遺跡周辺は、近年の市道建設及び区画整理事業により多くの遺跡が調査されている。調査区に接して宅地造成事業の西八日町遺跡Ⅶが調査されているほか、上の城遺跡、観音堂遺跡、東大門先遺跡などがある。発見された遺構は弥生時代から中世に及ぶ竪穴住居や掘立柱建物跡が中心であった。

今回、遺跡群内で、大和ハウス工業株式会社により宅地造成の計画がなされ佐久市教育委員会に文化財保護法93条の届出がなされた。当教育委員会では対象地の試掘調査を行い遺構が発見された為、保護協議を行い、遺跡の保護措置がとれない部分のみ、記録保存目的の発掘調査を行うこととなった。



第２図　周辺遺跡位置図（1：3000）

2．調査体制

調査受託者　佐久市教育委員会　教育長　　棚澤晴樹
事　務　局　社会教育部長　　荻原幸一
　　文化振興課長　　小林義夫
　　企画幹　　小林登志郎
　　文化財調査係長　　大塚広樹（４月～９月）　塩川宏幸（10月～）
　　文化財調査係　　小林眞寿　冨沢一明　上原　学　久保浩一郎　岩下 琴

調 査 担 当　冨沢一明
調　査　員　赤羽根篤　甘利隆雄　木内修一　岩松茂年　柳澤孝子　田中ひさ子
　　中澤　登　羽毛田利明　横尾敏雄　依田好行　赤羽根充江　渡辺　学
　　岩崎重子　林まゆみ　堀篭保子　小林妙子　橋詰勝子　橋詰信子
　　小林敏雄　山田叔正　油井満芳　浅沼勝男

3．調査日誌

平成29年３月10日　大和ハウス工業株式会社より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
３月14日　長野県教育委員会へ市教育委員会より28佐教文振第1472-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について（副申）
３月21日　長野県教育委員会より28教文第7-1778号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）
４月７日　大和ハウス工業株式会社と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。
４月10日～20日　記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行い、終了後引き続き報告書作成作業を行う。
４月20日　埋蔵文化財の発見届を佐久警察署に行う。
５月18日　長野県教育委員会より文化財認定がなされる。

4．遺構・遺物の概要

遺　構　竪穴住居址　11軒（弥生～平安）　掘立柱建物址　１棟
遺　物　土師器・須恵器（坏・甕・壺）　石製品（砥石）　鉄製品（鉄鏃）

5．標準土層

今回の調査地点は南西側に僅かに傾斜する台地上で、基本層序は３層に分かれⅢ層上面が遺構確認面である。確認面深さは地表より50～80cmほどであった。

第Ⅰ層　10YR5/1 褐灰色土
　　耕作土しまり弱い。
第Ⅱ層　10YR2/1 黒色土
　　軽石粒を多く含む。
第Ⅲ層　10YR6/8 明黄褐色土
　　P1層で上部に漸移層あり。

調査区遠景（西より）

６．調査の方法

遺構調査

住居址は均等に４分割し、対面する２区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・炉・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。

遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け３次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って２分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構Noで一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。

遺構測量

平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遣り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は手で竹ブラシを用い行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインＣを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。

図面は遺構を1/40で修正、遺物を1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

第３図　　調査全体図

写真・報告書

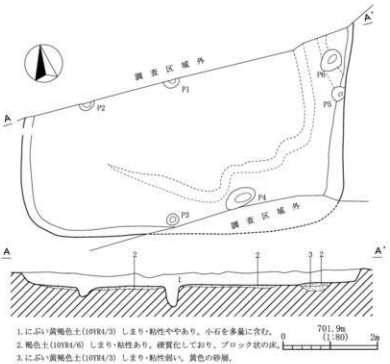
現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35㎜一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。報告書文章と挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。

第Ⅱ章　遺構と遺物

1．竪穴住居址

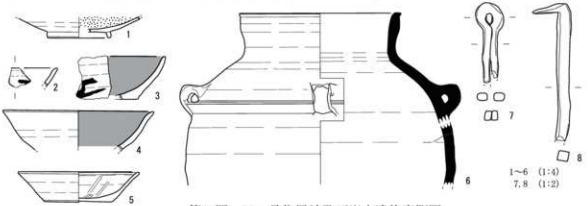
（1）Ｈ１号住居址

本址は調査区西端で検出された。形態は不明で、北側が調査区域外となる。規模は、長軸6.39mで短軸は検出部分で3.60mを測る。床面積は検出部分で18.89㎡を測る。壁深さは南東コーナー寄りで最大0.31mを測る。住居主軸方位はN－82°－Wを示す。床は全体に硬質で、全体に貼床が施されていた。ピットは、６か所に検出された。各ピットの規模はＰ１が径0.33m・深さ0.47m、Ｐ２が径0.32m・深さ0.26m、Ｐ３が径0.26m・深さ0.18m、Ｐ４が径0.70m・深さ0.22m、Ｐ５が径0.31m・深さ0.46m、Ｐ６が径0.51m・深さ0.47mを測る。住居掘り方は住居中央部が一段高く、壁周辺は一段深く掘り込まれていた。



出土遺物は覆土を中心に出土した。１は灰釉陶器皿である。２～５は土師器坏である。２と３には体部外面に墨書が確認できるが判読できない。６は須恵器壺でいわゆる「凸帯文付四耳壺」の類型と考えられるが、短頸である事や耳部の形態が異なる事から特殊である。７と８は鉄製品で、８は角釘である。

本址はこれらの出土遺物から10世紀前半に位置づけられる。



第４図　Ｈ１号住居址及び出土遺物実測図

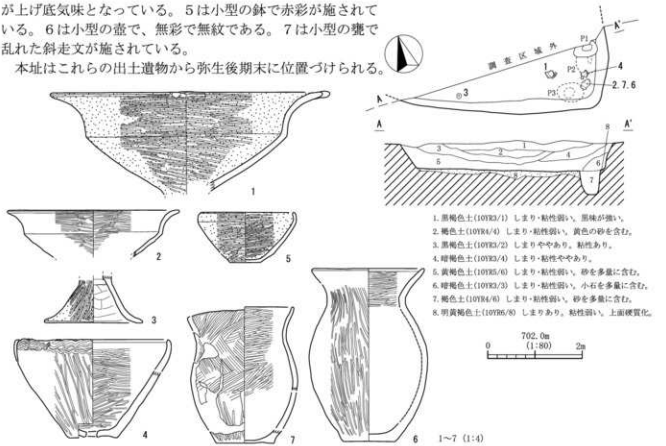
（2）Ｈ２号住居址

本址は調査区中央で検出された。形態は不明で、住居の南東コーナー部のみ検出された。規模は、いずれも検出部分で長軸3.70m・短軸1.11mを測る。床面積は検出部分で2.48㎡を測る。壁深さは南東コーナー寄りで最大0.59mを測る。床は全体に硬質で、全体に貼床が施されていた。ピットは掘り方も含め３か所で検出された。各ピットの規模はＰ１が径0.52m・深さ0.50m、Ｐ２が径0.56m・深さ0.35m、Ｐ３が径0.57m・深さ0.26mを測る。住居掘り方は均一であった。

出土遺物は床面を中心に出土した。１と２は高坏坏部、３は高坏脚部である。４は単孔の甑で、底

が上げ底気味となっている。５は小型の鉢で赤彩が施されている。６は小型の壺で、無彩で無紋である。７は小型の甕で乱れた斜走文が施されている。

本址はこれらの出土遺物から弥生後期末に位置づけられる。



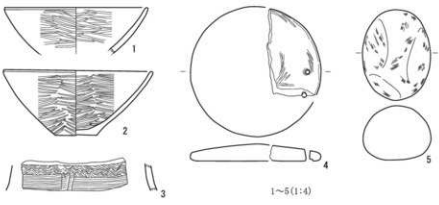
第５図　Ｈ２号住居址及び出土遺物実測図

（３）Ｈ３号住居址

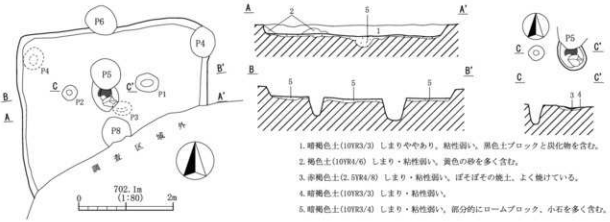
本址は調査区東側で検出された。形態は方形で、住居の南側は調査区域外となる。規模は、南北の軸長が推定で3.36m、東西の軸長が3.75mを測る。床面積は検出部分で8.89㎡を測る。壁深さは東壁中央部で最大0.22mを測る。床は全体に軟質で、全体に貼床が施されていた。ピットは掘り方も含め４か所で検出された。Ｐ１とＰ２は検出位置より主柱穴と考えら、柱間は1.68mを測る。各ピットの規模はＰ１が径0.48m・深さ0.41m、Ｐ２が径0.32m・深さ0.38m、Ｐ３が径0.40m・深さ0.16m、Ｐ４が径0.48m・深さ0.24mを測る。住居掘り方はほぼ均一であった。炉はＰ１とＰ２間で検出された。他の遺構に北側を壊されているが、形態は楕円形で南側に枕石的な意思が確認された。焼土は少量であったがよく焼けていた。規模は径0.76m・深さ0.1mを測る。

出土遺物は覆土を中心に少量出土した。１と２はいずれも無彩の鉢である。３は甕の頸部破片で櫛描簾状文と櫛描波状文を施す。４は蓋と考えられる。焼成前にあけられた孔が２か所確認できる。５は磨り石と考えられる。

本址はこれらの出土遺物や住居址形態より弥生後期末に位置づけられる。



第６図　Ｈ３号住居址出土遺物実測図



第７図　Ｈ３号住居址実測図

（４）Ｈ４号住居址

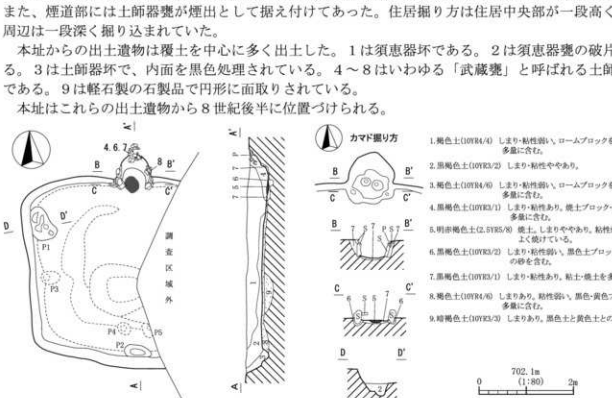
本址は調査区中央で検出された。形態は方形と考えられる。住居東半分が調査区域外となる。規模は、長軸3.66m、短軸は検出部で2.92mを測る。床面積は検出部分で8.62㎡を測る。壁深さは南壁の中央で最大0.33mを測る。住居主軸方位はN－６°－Eを示す。床は軟質で、カマド前面のみ硬質化が確認された。

床は全体に貼床が施されていた。ピットは掘り方も含め５か所で検出された。Ｐ２は入口施設のピットと考えられる。各ピットの規模はＰ１が径0.74m・深さ0.28m、Ｐ２が径0.58m・深さ0.14m、Ｐ３が径0.40m・深さ0.35m、Ｐ４が径0.29m・深さ0.29m、Ｐ５が径0.29m・深さ0.28mを測る。

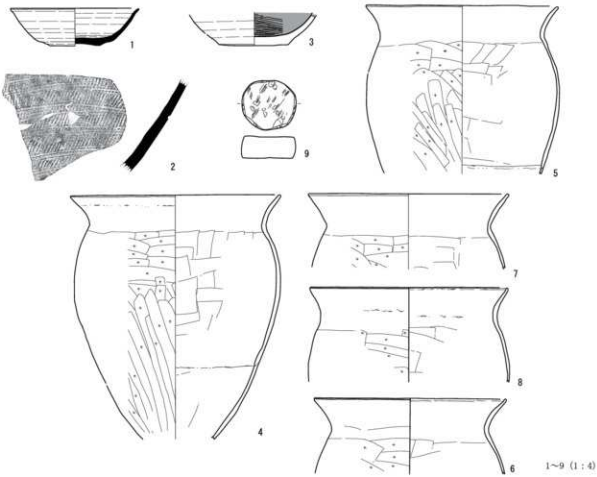
カマドは北壁中央部に構築されており、袖部は礫と粘土により構築され、火床部はよく焼けていた。また、煙道部には土師器甕が煙出として据え付けてあった。住居掘り方は住居中央部が一段高く、壁周辺は一段深く掘り込まれていた。

本址からの出土遺物は覆土を中心に多く出土した。１は須恵器坏である。２は須恵器甕の破片である。３は土師器坏で、内面を黒色処理されている。４～８はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる土師器甕である。９は軽石製の石製品で円形に面取りされている。

本址はこれらの出土遺物から８世紀後半に位置づけられる。



第８図　Ｈ４号住居址実測図



第９図　Ｈ４号住居址出土遺物実測図

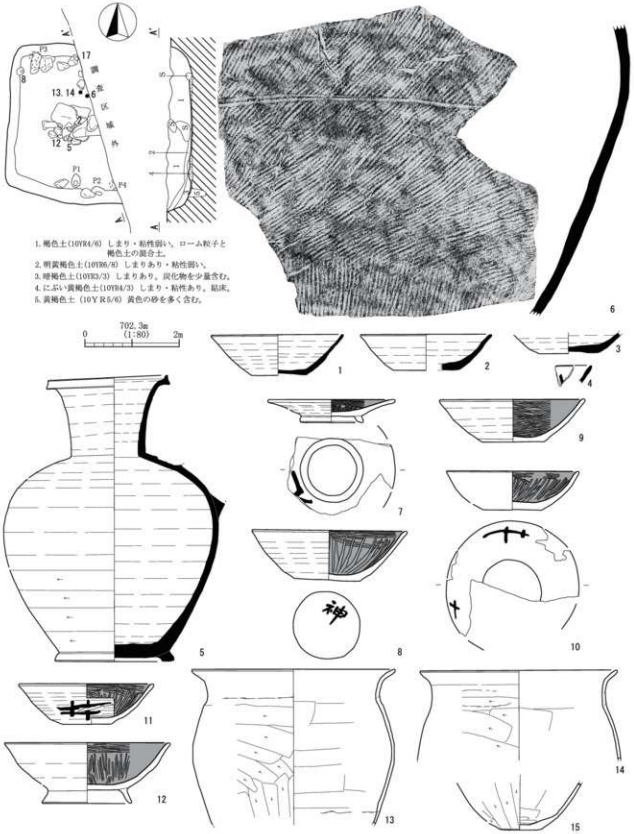
（５）Ｈ５号住居址

本址は調査区中央で検出された。形態は方形と考えられる。住居東半分が調査区域外となる。規模は、南北の長軸2.79m、短軸は検出部で1.96mを測る。床面積は検出部分で4.53㎡を測る。壁深さは南壁の中央で最大0.47mを測る。住居主軸方位はN－４°－Eを示す。床は僅かに軟質であった。床は全体に貼床が施されていた。ピットは掘り方も含め４か所で検出された。Ｐ１とＰ４は入口施設のピットと考えられる。各ピットの規模はＰ１が径0.28m・深さ0.41m、Ｐ２が径0.34m・深さ0.46m、Ｐ３が径0.38m・深さ0.21m、Ｐ４が径0.21m・深さ0.38mを測る。

本址は住居址中央に大型の自然礫が投げ込まれたような状態で検出された。礫はいずれも床直上にあり礫と床の間から図示した須恵器長頸壺が破砕した状態で出土した。

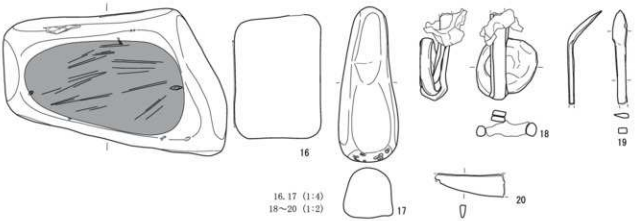
本址からの出土遺物は覆土を中心に多く出土し、20点を図示した。１～４は須恵器坏である。４は墨書が確認できたが判読は不明である。５は須恵器長頸壺である。取っ手部分が欠損している。また、胴部が円形に欠損し、調査された住居址内部分には破片すら発見されなかった為、意図的な破壊も考えられる。６は須恵器甕の破片である。７は土師器皿で内面黒色処理が行われ、体部外面に墨書が確認できる。８～11は土師器坏である。８は住居址北西コーナー壁際より出土した。内面に黒色処理が施されており、底部外面に「神」と判読できる墨書が確認できる。同じく10と11は体部外面に墨書が確認できる。11は「井」と判読できる。10は「十」「廿」と考えられる。12は土師器椀で、内面が黒色処理されている。13～15はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる土師器甕である。16は磨り石、17は敲石である。18～20は鉄製品である。18は小ぶりな円環に鉄棒が折り返し添えられている。19は鉄鏃の刃先が折り曲げられた状態と考えられる。

20は刀子の切っ先部分と考えられる。本址はこれらの出土遺物から９世紀前半に位置づけられる。



第10図　Ｈ５号住居址及び出土遺物実測図

1～15 (1:4)



第11図　Ｈ５号住居址出土遺物実測図

（６）Ｈ６号住居址

本址は調査区中央で検出された。形態は不明である。住居北東コーナー部分が検出されたのみである。規模は、南北の長軸2.02m、短軸は0.49mを測る。床面積は検出部分で0.76㎡を測る。壁深さは北壁の中央で最大0.42mを測る。住居主軸方位は検出された東壁を基準にするとN－５°－Eを示す。床は僅かに硬質であり、全体に貼床が施されていた。

本址からの出土遺物は覆土を中心に少量出土した。１は須恵器坏である。２は土師器椀で高台部を欠損している。体部外面に「田」と考えられる墨書が確認できる。３～６は土師器坏である。３と４は体部外面に墨書が確認できるが判読は不明である。６は内面見込み部に暗文風のミガキが施されている。７は土師器甕で口縁部が「く」の字状に屈曲するのが特徴である。

本址はこれらの出土遺物から10世紀前半に位置づけられる。

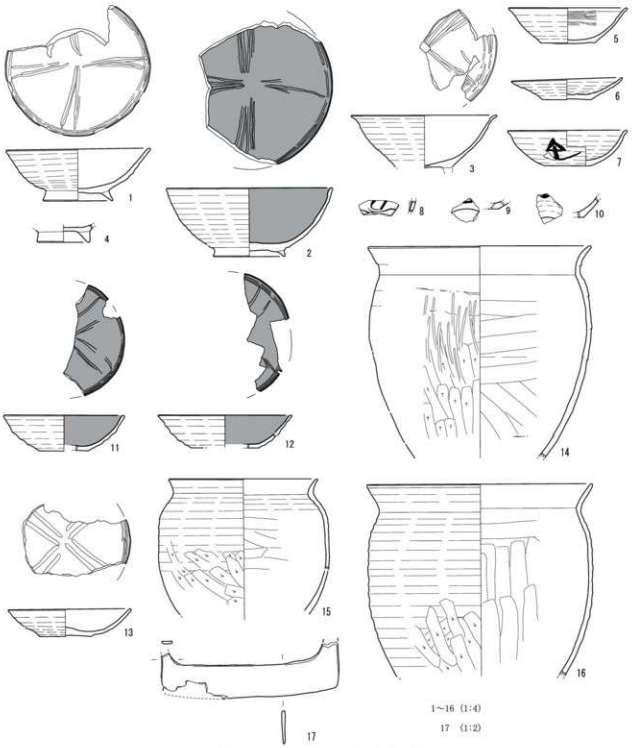
第12図　Ｈ６号住居址及び出土遺物実測図

（７）Ｈ７号住居址

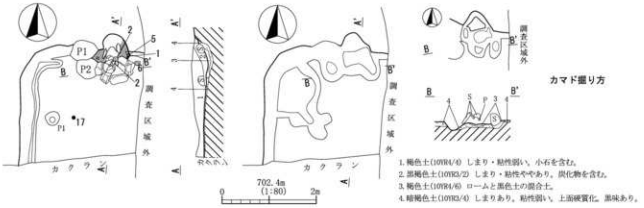
本址は調査区中央南よりで検出された。形態は方形と考えられる。住居東半分が調査区域外となり、南側が過去の工事により削平されている。規模は、南北の残存値が2.11m、東西の検出長さが2.22mを測る。床面積は検出部分で4.56㎡を測る。壁深さは北西コーナー部で0.38mを測る。住居主軸方位はNを示す。床は硬質で、特にカマド前面は硬質化が顕著であった。床は全体に貼床が施されていた。ピットは１か所のみ検出で、Ｐ１の規模は径0.28m・深さ0.12mを測る。西壁には壁溝が周り、規模は幅0.18～0.24m・深さ0.04～0.06mを測る。住居址掘り方は北西コーナー部が一段深く掘り込まれていた。

本址からの出土遺物はカマド周辺部や覆土を中心に多く出土した。１～４は土師器椀である。１～３は内面の見込み部に十文字の暗文風のミガキが施されている。５～13は土師器坏である。７～10は体部外面に墨書が確認できるが判読できない。14～16は土師器甕で、15と16はいわゆる「ロクロ甕」と呼ばれる甕である。17は鉄製品で、苧引金具と考えられる。

本址はこれらの出土遺物から10世紀前半に位置づけられる。



第13図　Ｈ７号住居址出土遺物実測図



第14図　Ｈ７号住居址実測図

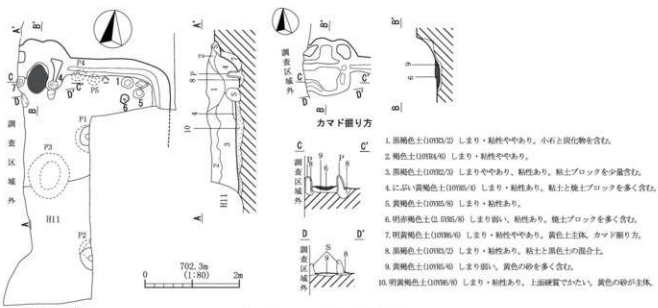
（８）Ｈ８号住居址

本址は調査区南端で検出された。H11号住居址と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は方形と考えられる。住居西半分が調査区域外となり、南側はH11号住居址により削平されている。規模は、南北の長軸長が推定で5.28m、東西の短軸長が推定で4.64mを測る。床面積は検出部分で7.96㎡、推定で23.49㎡を測る。壁深さは北東コーナー部で0.50mを測る。住居主軸方位はN－８°－Wを示す。床は硬質で、特にカマド前面は硬質化が顕著であった。床は全体に貼床が施されていた。ピットは掘り方も含め５か所で検出された。Ｐ１とＰ２は主柱穴と考えられ、柱間は2.57mを測る。ピットの規模は、Ｐ１が径0.40m・深さ0.31m、Ｐ２が径0.46m・深さ0.35m、Ｐ３が径0.95m・深さ0.35m、Ｐ４が径0.31m・深さ0.11m、P5が径0.25m・深さ0.11mを測る。北壁から西壁には壁溝が周り、規模は幅0.25～0.28m・深さ0.06～0.08mを測る。住居址掘り方はほぼ均一であった。

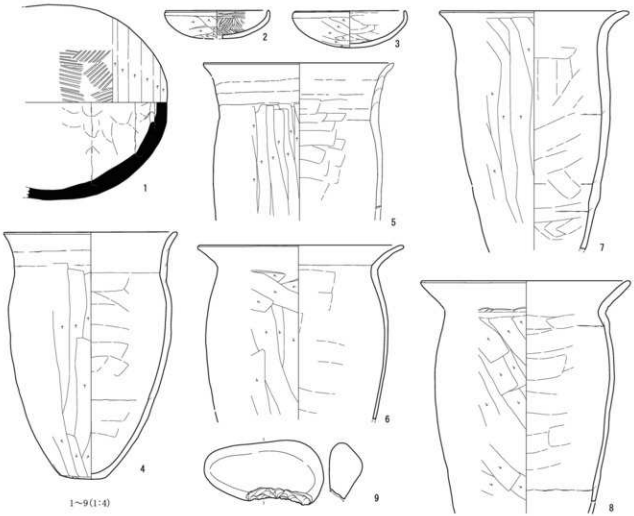
カマドは北壁中央部に構築されており、袖部は焚口部に礫を使用し、中間に土師器甕を倒立させ芯材としていた。火床部はよく焼けていた。カマド掘り方は袖部に構築材の掘り込みが検出された。

本址からの出土遺物はカマド周辺部や北西コーナー付近を中心に多く出土した。１は須恵器の横瓶である。２と３は土師器坏である。半球形状の坏で、２は内面ミガキが施されている。４～８は土師器甕である。９は敲石と考えられる。

本址はこれらの出土遺物から７世紀後半に位置づけられる。



第15図　Ｈ８号住居址実測図



第16図　Ｈ８号住居址出土遺物実測図

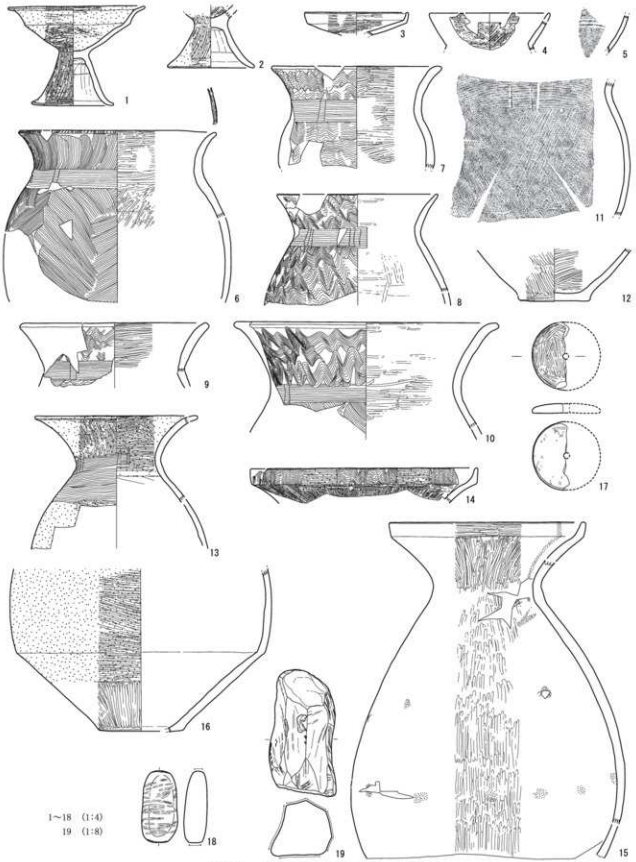
（９）Ｈ９号住居址

本址は調査区西端で検出された。Ｈ１号・H10住居址と重複関係にあり、本址が一番古い。形態は南北に長い長方形と考えられ、住居南端部分のみが検出された。規模は、東西の軸長が6.36m、南北が検出値で1.04mを測る。床面積は検出部分で5.52㎡を測る。壁深さは東壁で0.47mを測る。住居主軸方位はNを示す。床は硬質で、全体に貼床が施されていた。ピットは掘り方も含め２か所で検出された。Ｐ２は掘り方で確認したが、入口施設と考えられる。ピットの規模は、Ｐ１が径0.66m・深さ0.26m、Ｐ２が径1.38m・深さ0.30m、を測る。また、Ｐ１の脇の床面に土坑が築かれており、形態は楕円形で、規模は長径1.01m・短径0.95m・深さ0.66mを測る。壁溝は南壁中央部分が途切れるが、検出された壁下部分は周る。規模は幅0.20～0.37m・深さ0.14～0.18mを測る。住居址掘り方はほぼ均一であった。

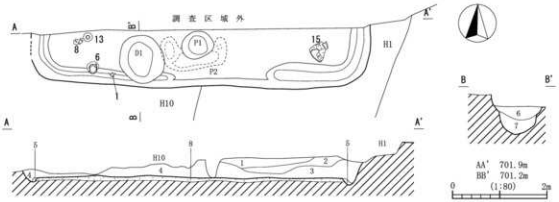
本址からの出土遺物は多く、特に床面からの出土が多かった。１と２は高坏である。いずれも赤彩が施されている。３は器台の坏部と考えられる。４は小型丸底土器で、赤彩が施されている。５は細い粘土帯が２段確認出来るが、小片の為全容は不明である。外来系土器か。６～12は甕である。６は羽状構成の櫛描文が施され、口唇部に刺突が確認できる。７～10は、胴部や口縁部に櫛描波状文、頸部に櫛描簾状文を施す。

13～16は壺である。14は口縁部の破片で、赤彩と波状文が交互に施文される。15は円形の赤彩を施した壺であり、在地の赤彩方法とは異なる。17は土製紡錘車、18は敲石であるが、全体が磨かれている。19は大型の砥石である。

本址はこれらの出土遺物から弥生後期末に位置づけられる。



第17図　Ｈ９号住居址出土遺物実測図



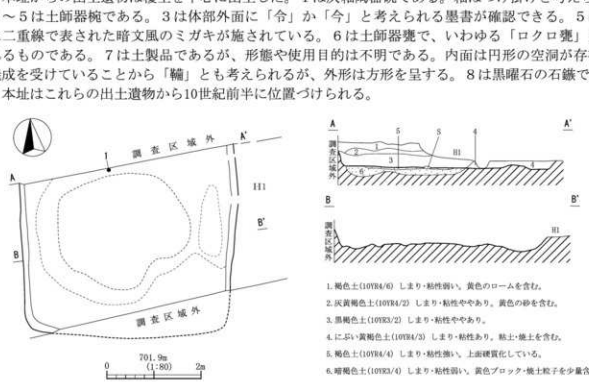
第18図　H９号住居址実測図

（10）H10号住居址

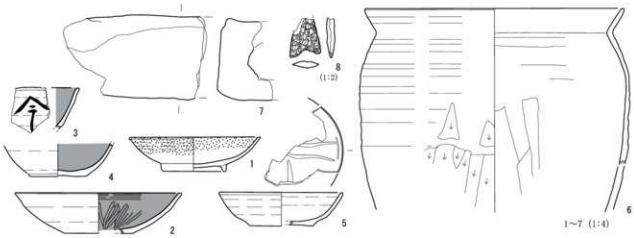
本址は調査区西端で検出された。Ｈ１号住居址と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は方形と考えられる。北側の調査区域外の部分で少量の粘土が床面より確認された為、カマドは北壁に存在すると考えられる。規模は、南北軸の検出値が3.78m、東西軸が4.32mを測る。床面積は検出部分で13.23㎡を測る。壁深さは北西部で0.54mを測る。床は硬質で、特に中央部分は硬質化が顕著であった。床は全体に貼床が施されていた。住居址掘り方は住居中央部分が一段高くなり、壁際が一段深く掘り込まれていた。

本址からの出土遺物は覆土を中心に出土した。１は灰釉陶器碗である。釉はつけ掛けと考えられる。２～５は土師器椀である。３は体部外面に「今」か「今」と考えられる墨書が確認できる。５は内面に二重線で表された暗文風のミガキが施されている。６は土師器甕で、いわゆる「ロクロ甕」と呼ばれるものである。７は土製品であるが、形態や使用目的は不明である。内面は円形の空洞が存在し、焼成を受けていることから「鞴」とも考えられるが、外形は方形を呈する。８は黒曜石の石鏃である。

本址はこれらの出土遺物から10世紀前半に位置づけられる。



第19図　H10号住居址実測図



第20図　H10号住居址出土遺物実測図

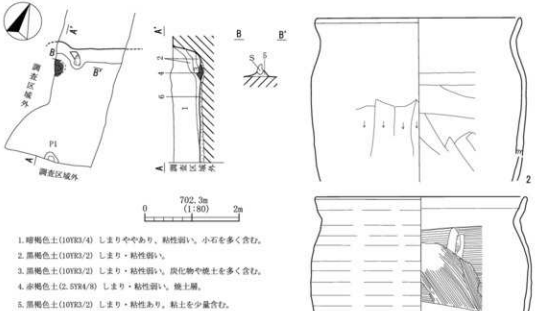
(11) H11号住居址

本址は調査区南端で検出された。形態は方形と考えられ、平成26年度に調査が行われた西八日町遺跡Ⅶの H７号住居址と同一住居と考えられる（Ｐ３の全体図参照）。規模は、南北軸の検出値が2.00m、東西軸が2.12mを測る。床面積は検出部分で4.53㎡を測る。床は硬質で、特にカマド前面は硬質化が顕著であった。床は全体に貼床が施されていた。住居址掘り方はほぼ均一であった。ピットは一ヶ所検出され、Ｐ１の規模は径0.29m・深さ0.10mを測る。

カマドは北壁で検出され、袖部は粘土と礫により構築されていた。火床部はよく焼けていたが、西側半分が調査区域外となる為、全容は不明である。

本址からの出土遺物は覆土を中心に出土したが少量であり、３点を図示したのみである。１は土師器坏で、２と３は土師器甕である。いずれもいわゆる「ロクロ甕」と呼ばれるものである。

本址は出土遺物が少なく、不確実であるが10世紀代に位置づけられると考える。



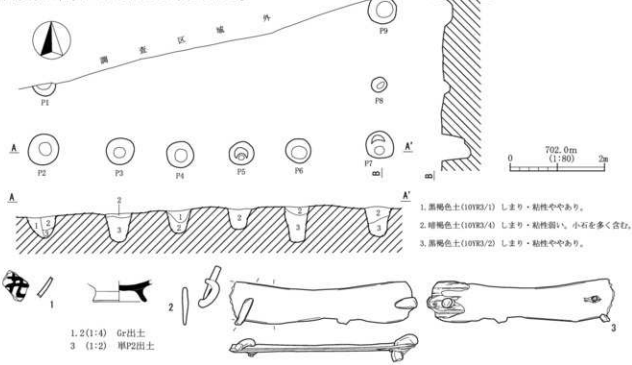
第21図　H11号住居址及び出土遺物実測図　1~3 (1:4)

２．掘立柱建物址

（１）Ｆ１号掘立柱建物址

本址は調査区東端で検出された。形態は側柱式の掘立柱建物址で、北側が調査区域外となり、全体規模は不明である。検出されたピット間の規模は、Ｐ２～Ｐ７間が7.08m・Ｐ７～Ｐ９間が3.00mを測る。各ピットの規模はＰ１が径0.47m・深さ0.26m、Ｐ２が径0.67m・深さ0.46m、Ｐ３が径0.62m・深さ0.62m、Ｐ４が径0.58m・深さ0.48m、Ｐ５が径0.51m・深さ0.48m、Ｐ６が径0.53m・深さ0.74mを測る。Ｐ７が径0.63m・深さ0.62m、Ｐ８が径0.33m・深さ0.11m、Ｐ９が径0.61m・深さ0.16mを測る。柱痕を示すような堆積は観察できなかった。

出土遺物は、Ｐ３より土師器坏片、Ｐ４より土師器坏片と土師器甕片があったのみで図示できるものはなかった。これら土器片はいずれも古墳時代後期を示す物であり、不確実ではあるが本址は古墳時代後期に位置づけられると考えられる。



第22図　Ｆ１号掘立柱建物址及びグリッド・単Pit出土遺物実測図

３．調査の成果

本調査は302㎡という小規模な発掘調査であったが、竪穴住居址11軒を検出し、出土遺物も弥生時代後期から平安時代に及ぶ土器や須恵器、石器や金属製品などが多量に出土した。

中でも注目される出土遺物としては、Ｈ９号住居址の弥生後期末の土器群があげられる。出土した土器群の中には本文でも指摘したとおり、器台・小型丸底土器が伴ない、器種不明ではあるが外来系と考えられる土器片も出土している。在地の箱清水式土器は、甕について旧来の形態を保つものが多いが、壺に関しては特異なものがある。まず、14の壺口縁部は、折り返し状の口縁部に箱清水式では見られない施文が施されている。また、15の壺は全体は無彩で、頸部も無紋であるが、胴部に２段の円形赤彩が施されている。このような塗彩方法は箱清水式では管見しない。あえて類例を求めれば、東海のいわゆる「パレス壺」に求めることが出来ようか。いずれにせよ、弥生末から古墳初頭の土器変遷を考える上で希少な資料である。

もう一点注目される遺物として、Ｈ５号住居址出土の「神」と墨書された土師器坏があげられる。本址はカマドが調査区域外となるため、住居址と確定するには危険であるが、大型礫の出土状況や出土例の少ない須恵器長頸壺などを考え合わせると祭祀的な要素も考えられ、「神」と書かれた意味を考える上で貴重な調査資料となると思われる。以上雑駁ではあるが調査のまとめとしたい。

H1	種別	器種	法量			成形・調整・文様			推定値( )残存値< >丸底●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考		出土位置
1	灰釉陶器	皿	–	(6.6)	<2.2>	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り後高台貼付		回転実測	脇方
2	土師器	坏	–	–	–	ロクロナデ	ロクロナデ　墨書		断面実測	
3	土師器	坏	–	–	–	ロクロナデ　ミガキ　黒色処理	ロクロナデ		断面実測	
4	土師器	坏	(15.9)	–	<4.3>	ロクロナデ　黒色処理	ロクロナデ		回転実測	脇方
5	土師器	坏	(12.8)	(6.6)	3.2	ロクロナデ　ミガキ	ロクロナデ→底部回転糸切り		回転実測	検出
6	須恵器	壺	(17.0)	–	(18.2)	ロクロナデ	ロクロナデ　凸帯　耳付		回転実測	

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
7	鉄製品	不明	<4.3>	<1.6>	<0.5>	–	下部欠損	
8	鉄製品	角釘	<7.3>	1.5	<0.5>	–	先端欠損	検出

H2	種別	器種	法量			成形・調整・文様			推定値( )残存値< >丸底●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考		出土位置
1	弥生	高坏	(28.8)	–	5.3	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩　口縁部突起		回転実測	床直
2	弥生	高坏	(18.2)	–	(5.0)	ミガキ	ミガキ		回転実測	床直
3	弥生	高坏	–	10.4	(5.0)	ヘラナデ	ミガキ→赤彩		完全実測	
4	弥生	甕	(16.0)	5.0	10.4	ミガキ	ミガキ　口縁部に櫛描波状文		完全実測	
5	弥生	鉢	(10.1)	3.2	5.3	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩		完全実測	
6	弥生	壺	(11.9)	5.5	16.3	ミガキ	ミガキ		完全実測	
7	弥生	甕	(11.2)	6.1	14.4	ミガキ	櫛描斜走文		完全実測	脇方

H3	種別	器種	法量			成形・調整・文様			推定値( )残存値< >丸底●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考		出土位置
1	弥生	鉢	(15.2)	(6.6)	<2.2>	ミガキ	ミガキ		回転実測	
2	弥生	鉢	18.8	4.4	6.9	ミガキ	ミガキ		完全実測	
3	弥生	壺	–	–	<2.8>	ミガキ	櫛描波状文		回転実測	
4	弥生	蓋	9.2	5.7	1.6	ミガキ	ミガキ	穿孔前穿孔		

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
5	磨石	石製品	9.6	7.2	5.8	506.88	全体に磨り	検出

H4	種別	器種	法量			成形・調整・文様			推定値( )残存値< >丸底●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考		出土位置
1	須恵器	坏	(13.6)	(5.2)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ		回転実測	床直
2	須恵器	甕	–	–	–	当て具痕→ナデ	タタキ目→ナデ		断面実測	
3	土師器	坏	–	7.4	(3.5)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部ヘラケズリ		完全実測	カマド
4	土師器	甕	22.3	–	<26.7>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ		完全実測	カマド
5	土師器	甕	20.3	–	<17.8>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ		完全実測	カマド
6	土師器	甕	(20.3)	–	<8.0>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ		回転実測	検出
7	土師器	甕	(21.2)	–	(8.0)	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ		回転実測	検出
8	土師器	甕	(20.9)	–	<10.0>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ		回転実測	カマド

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
9	磨り石?	軽石	5.2	5.7	2.4	28.19	全体に磨り	

H5	種別	器種	法量			成形・調整・文様			推定値( )残存値< >丸底●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考		出土位置
1	須恵器	坏	14.1	5.9	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ→底部右回転糸切り		完全実測	
2	須恵器	坏	(14.0)	(7.0)	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り		回転実測	
3	須恵器	坏	–	6.4	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ→底部右回転糸切り		完全実測	
4	須恵器	坏	–	–	–	ロクロナデ	ロクロナデ　墨書		断面実測	
5	須恵器	長頸壺	12.5	12.6	30.2	ロクロナデ	口縁ヨコナデ→胴部回転ヘラケズリ		完全実測	検出
6	須恵器	甕	–	–	–	ロクロナデ→当て具痕	ロクロナデ→平行タタキ		断面実測	
7	土師器	皿	(13.6)	6.7	2.4	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ　墨書		完全実測	
8	土師器	坏	16.5	7.1	5.2	ヘラミガキ　黒色処理　暗文	ロクロナデ　底部手持ちヘラケズリ　墨書		完全実測	
9	土師器	坏	15.5	6.6	4.5	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ→回転ヘラケズリ		完全実測	
10	土師器	坏	14.1	(6.2)	4.1	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ　底部回転糸切り　墨書		完全実測	
11	土師器	坏	14.3	5.5	4.4	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ　底部回転糸切り　墨書		完全実測	床直
12	土師器	椀	(17.6)	9.5	6.4	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ　底部回転ヘラケズリ→高台貼付		完全実測	
13	土師器	甕	(21.6)	–	<16.4>	ヘラナデ	ヘラケズリ		回転実測	
14	土師器	甕	(21.0)	–	(9.4)	ヘラナデ	ヘラケズリ		回転実測	
15	土師器	甕	–	4.5	<5.1>	ヘラナデ	ヘラケズリ		完全実測	床直

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
16	台石	石製品	23.7	15.6	9.3	–	被熱割れあり	
17	敲石	石製品	16.4	6.4	5.3	833.56	下端部に敲打痕	
18	不明	鉄製品	<4.8>	<3.3>	鐶<0.6>	–	鐶に棟状の鉄を折り曲げて組み合わせる。	
19	鉄鏃	鉄製品	<4.9>	<0.8>	<0.25>	–	基部欠損、片刃?	
20	刀子	鉄製品	<3.7>	<1.2>	<0.3>	–	刃部のみ残存	

H6	種別	器種	法量			成形・調整・文様			推定値( )残存値< >丸底●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考		出土位置
1	須恵器	坏	–	(7.0)	<1.8>	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り		回転実測	
2	土師器	椀	(13.9)	–	<4.4>	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り　墨書		完全実測	
3	土師器	坏	–	–	–	ロクロナデ　黒色処理	ロクロナデ　墨書		断面実測	
4	土師器	坏	–	–	–	ロクロナデ　黒色処理	ロクロナデ　墨書		断面実測	
5	土師器	坏	(13.8)	5.8	4.2	ロクロナデ　黒色処理	ロクロナデ　底部周辺ヘラケズリ		完全実測	
6	土師器	坏	(14.8)	6.0	5.3	ロクロナデ　黒色処理　暗文	ロクロナデ　底部ヘラケズリ		完全実測	
7	土師器	甕	(25.5)	–	<10.5>	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ→ヘラケズリ		回転実測	

H7	種別	器種	法量			成形・調整・文様			推定値( )残存値< >丸底●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考		出土位置
1	土師器	椀	15.3	7.2	5.5	暗文	ロクロナデ→底部回転糸切り		完全実測	床直
2	土師器	椀	(12.6)	7.4	7.3	暗文　黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り		完全実測	カマド Ⅱ区
3	土師器	椀	(15.4)	–	<5.6>	暗文	ロクロナデ　高台欠損		回転実測	カマド Ⅱ区　Ⅰ区

H7	種別	器種	法量			成形・調整・文様		指定欄(○)残存欄<・×凡例●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
4	土師器	椀	－	5.4	<1.9>	ロクロナデ	ロクロナデ 高台貼付	完全実測	カマド
5	土師器	坏	(12.6)	(5.8)	3.8	ヘラミガキ	ロクロナデ→回転糸切り	回転実測	
6	土師器	坏	11.8	5.1	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ→底部右回転糸切り	完全実測	
7	土師器	坏	12.7	4.9	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ 墨書	完全実測	Ⅱ区
8	土師器	坏	－	－	－	暗文 黒色処理	ロクロナデ 墨書	破片実測	Ⅱ区
9	土師器	坏	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ 墨書	破片実測	
10	土師器	坏	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ 墨書	破片実測	Ⅱ区
11	土師器	坏	(12.8)	(5.2)	3.8	暗文 黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	Ⅱ区
12	土師器	坏	(14.2)	(7.2)	3.5	暗文 黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	Ⅱ区
13	土師器	坏	(13.1)	5.4	2.9	暗文	ロクロナデ→底部右回転糸切り	完全実測	カマド
14	土師器	甕	23.6	－	<22.5>	ヘラナデ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	完全実測	カマド Ⅱ区
15	土師器	甕	(15.8)	－	<14.4>	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラナデ	回転実測	
16	土師器	甕	(23.8)	－	<20.4>	ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ	回転実測	カマド Ⅰ区 Ⅱ区

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
17	平刃金具	鉄製品	<9.4>	<2.5>	<0.3>	－	一部欠損	

H8	種別	器種	法量			成形・調整・文様		指定欄(○)残存欄<・×凡例●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	横瓶	－	－	－	ロクロナデ 当て具痕	ロクロナデ タタキ 端部回転ヘラケズリ	回転実測	
2	土師器	坏	11.0	11.1	<3.0>	ヘラミガキ	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	完全実測	
3	土師器	坏	11.8	12.2	3.9	ヘラナデ	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	完全実測	
4	土師器	甕	18.3	4.8	26.3	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測	カマド構築材
5	土師器	甕	(20.2)	－	<16.6>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測	
6	土師器	甕	21.8	－	<25.4>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測	
7	土師器	甕	20.0	－	<25.4>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	完全実測	
8	土師器	甕	(22.1)	－	<24.7>	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ→頸部ナデ	完全実測	カマド

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
9	敲石	石製品	12.7	6.8	3.7	390.34	側面に敲打痕	

H9	種別	器種	法量			成形・調整・文様		指定欄(○)残存欄<・×凡例●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	弥生	高坏	14.5	8.7	10.6	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	完全実測	
2	弥生	高坏	－	9.2	<6.1>	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	完全実測	D1
3	弥生	器台	11.0	10.5	<2.9>	ミガキ	ミガキ	完全実測	D1
4	弥生	小型丸底	(12.8)	－	<3.9>	ミガキ→赤彩	ミガキ→赤彩	回転実測	
5	弥生	不明	－	－	－	ナデ→黒ミガキ	ナデ	断面実測	
6	弥生	壺	20.8	－	<18.2>	ミガキ	口唇部に結み 櫛描簾状文 羽状構成の櫛描斜走文	完全実測	
7	弥生	壺	(18.0)	－	<10.9>	ミガキ	櫛描簾状文 櫛描波状文	回転実測	
8	弥生	壺	(17.0)	－	<11.8>	ミガキ	櫛描簾状文 櫛描波状文	回転実測	
9	弥生	壺	(20.0)	－	<6.9>	ミガキ	櫛描簾状文 櫛描波状文	回転実測	
10	弥生	壺	(28.0)	－	<12.4>	刷毛目の後ミガキ	櫛描簾状文 櫛描波状文 櫛描斜走文	回転実測	
11	弥生	壺	－	－	－	ミガキ	櫛描簾状文 櫛描斜走文	断面実測	胴方
12	弥生	壺	－	7.5	<5.6>	ミガキ	ミガキ	完全実測	D1
13	弥生	壺	(17.2)	－	<14.0>	胴部ヘラナデ	ミガキ→赤彩 櫛描簾状文 櫛描横走平行線文	完全実測	床直
14	弥生	壺	(24.0)	－	<3.7>	ミガキ→赤彩	口縁櫛描波状文→ミガキ→赤彩	回転実測	D1
15	弥生	壺	20.9	－	<35.5>	口縁ミガキ	ミガキ	完全実測	
16	弥生	壺	－	(9.0)	<17.2>	摩滅	ミガキ→赤彩	回転実測	D1

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
17	紡錘車	土製品	(7.2)	径(0.7)	1.0	33.00	ミガキ	D1
18	敲石	石製品	7.6	3.8	2.4	111.46	両端面に敲打痕、正面に磨状の擦り痕	
19	砥石	石製品	<4.8>	<3.3>	厚<0.6>	－	砥面数6 擦痕、条痕、刺突痕あり	

H10	種別	器種	法量			成形・調整・文様		指定欄(○)残存欄<・×凡例●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	灰釉陶器	皿	13.7	6.5	3.7	ロクロナデ 釉つけ掛け	ロクロナデ	完全実測	
2	土師器	坏	(17.5)	(7.2)	4.3	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	回転実測	床直
3	土師器	坏	－	－	－	ロクロナデ 黒色処理	ロクロナデ 墨書	断面実測	
4	土師器	坏	－	6.2	<3.3>	ロクロナデ 黒色処理	ロクロナデ 底部回転糸切り	完全実測	床直
5	土師器	坏	(12.9)	(6.7)	3.6	ロクロナデ 暗文	口縁ヨコナデ→底部回転ヘラケズリ	回転実測	床直
6	土師器	甕	(27.2)	－	<21.6>	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ	回転実測	床直

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
7	不明	土製品	15.2	8.8	5.9	446.11	被熱あり	
8	砥	黒曜石	<2.1>	1.6	<0.4>	1.27	先端部欠損	

H11	種別	器種	法量			成形・調整・文様		指定欄(○)残存欄<・×凡例●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	坏	12.5	－	<3.9>	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測	
2	土師器	甕	(21.5)	－	<17.2>	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ	回転実測	カマド
3	土師器	甕	(22.2)	－	<19.4>	刷毛目→ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ	回転実測	カマド

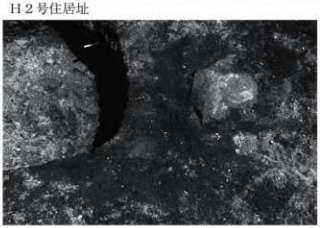
Gr	種別	器種	法量			成形・調整・文様		指定欄(○)残存欄<・×凡例●	
			□径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	坏	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ 墨書	破片実測	検出
2	土師器	椀	－	5.7	<2.2>	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測	検出

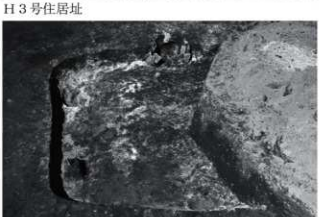
No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
3	紐?	鉄製品	<9.9>	<2.2>	板<0.35>		板状の両端に紐が貫通。一部に木質が残る。	P2

Ｈ１号住居址

Ｈ２号住居址

Ｈ３号住居址


Ｈ３号住居址炉


Ｈ４号住居址

Ｈ４号住居址カマド

Ｈ５号住居址

Ｈ５号住居址遺物出土状況

Ｈ７号住居址

Ｈ７号住居址カマド

Ｈ８号住居址遺物出土状況

Ｈ６号住居址

Ｈ８号住居址

Ｈ８号住居址カマド

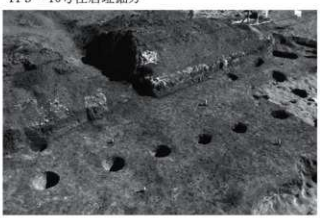
Ｈ９号住居址

Ｈ９号住居址遺物出土状況

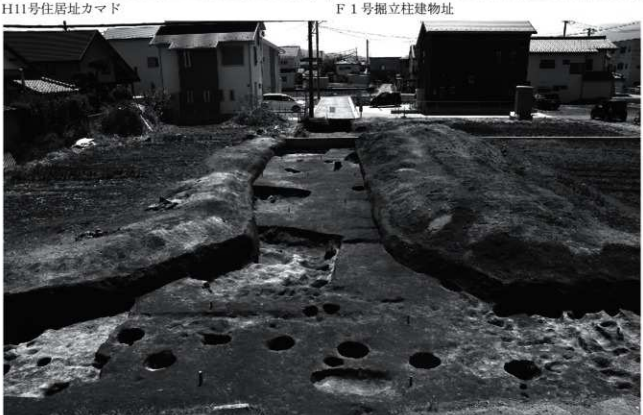
H10号住居址

H９・10号住居址掘方

H11号住居址カマド

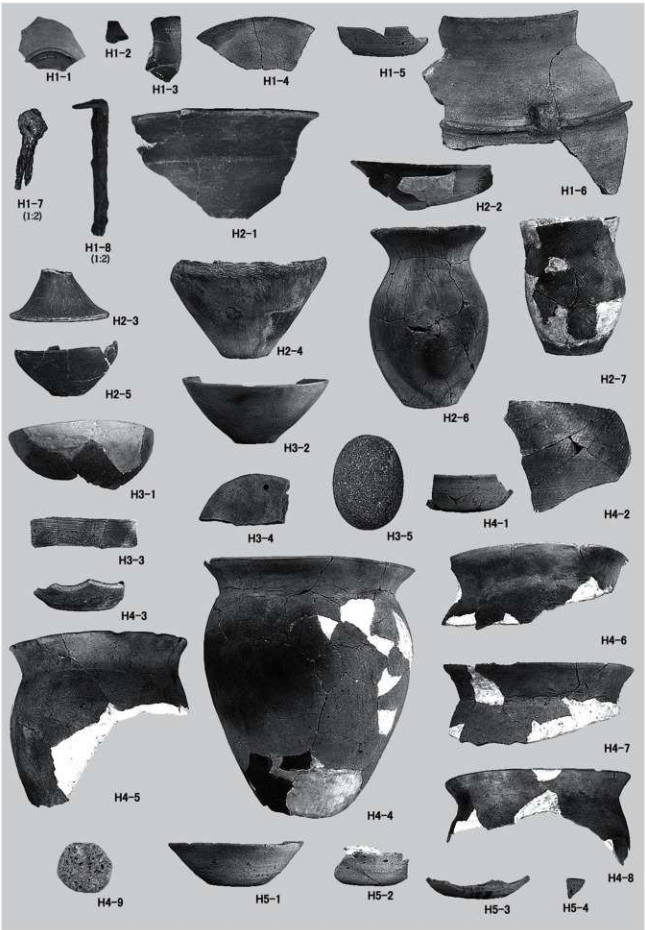


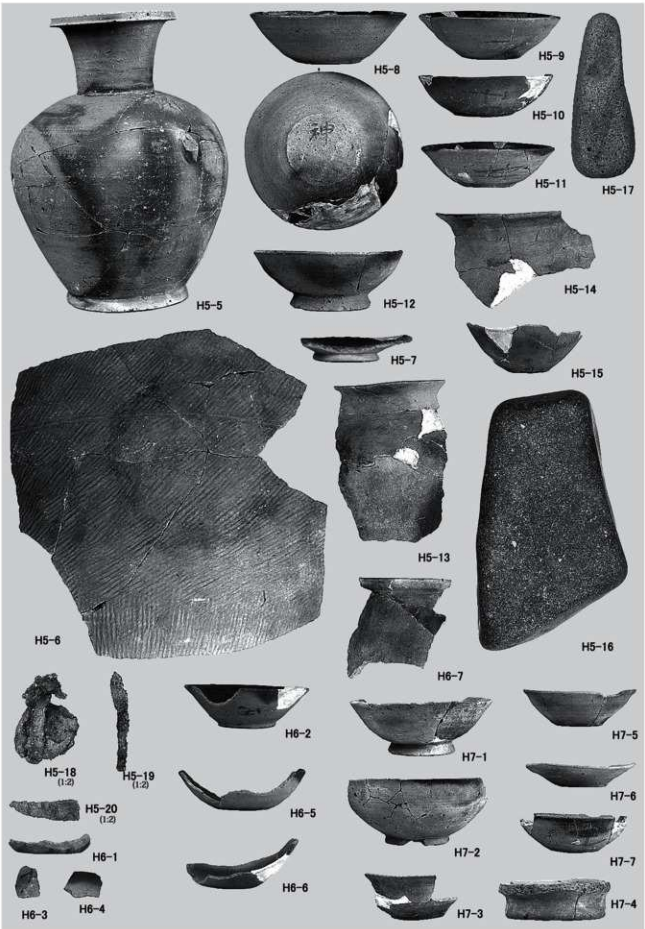
Ｆ１号掘立柱建物址



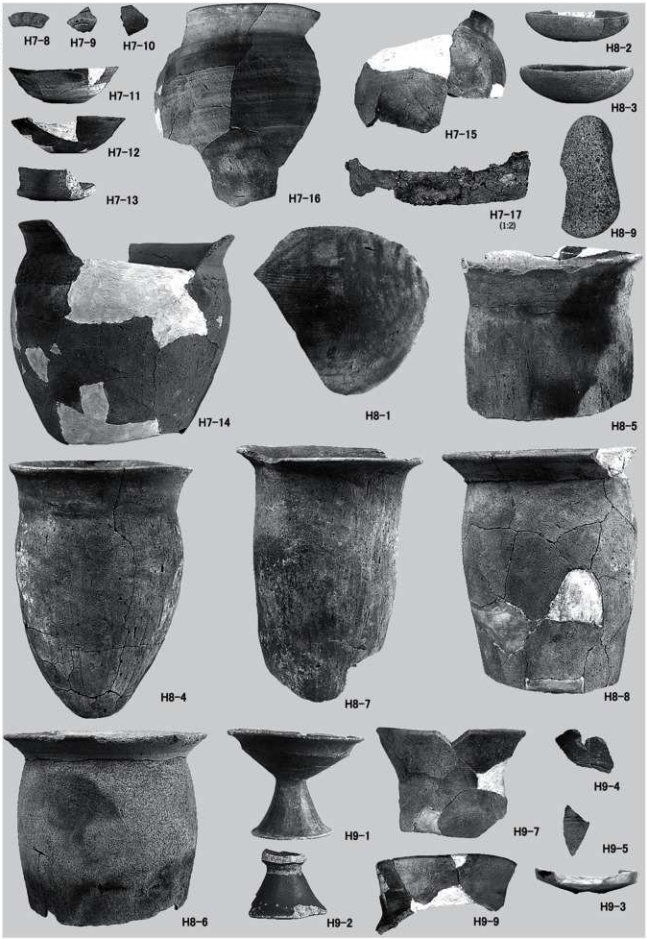
調査区近景(北より)

図版四

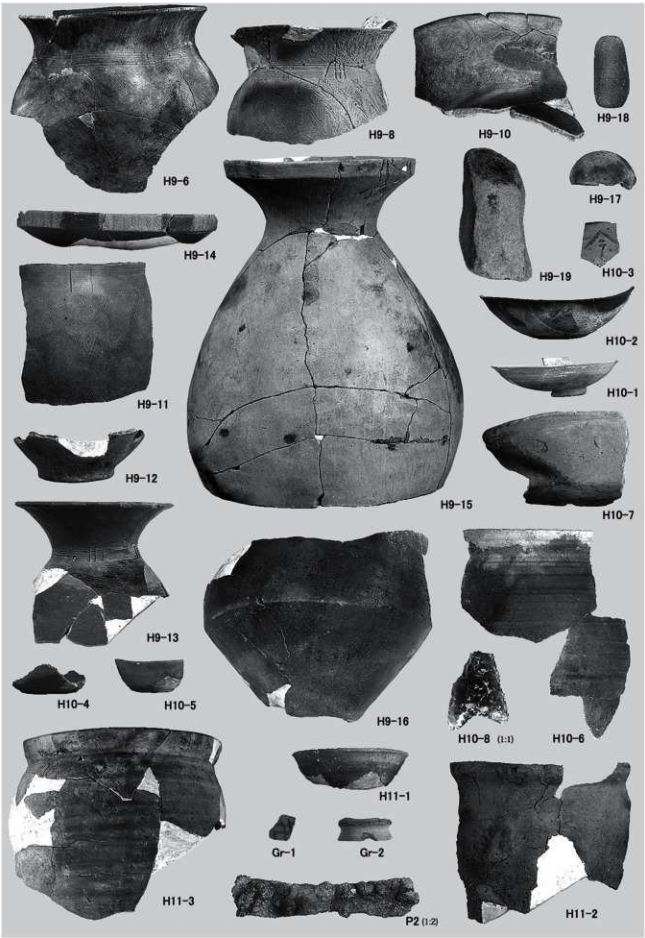

H1-1
H1-2
H1-3
H1-4
H1-5
H1-6
H1-7
(1:2)
H1-8
(1:2)
H2-1
H2-2
H2-3
H2-4
H2-5
H2-6
H2-7
H3-1
H3-2
H3-3
H3-4
H3-5
H4-1
H4-2
H4-3
H4-4
H4-5
H4-6
H4-7
H4-8
H4-9
H5-1
H5-2
H5-3
H5-4


H5-5
H5-8
H5-9
H5-10
H5-11
H5-17
H5-12
H5-14
H5-7
H5-15
H5-13
H5-6
H5-16
H6-7
H5-18
(1:2)
H5-19
(1:2)
H6-2
H7-1
H7-5
H5-20
(1:2)
H6-5
H7-6
H6-1
H7-2
H7-7
H6-6
H6-3
H6-4
H7-3
H7-4

図版六


H7-8
H7-9
H7-10
H7-11
H7-12
H7-13
H7-16
H7-15
H8-2
H8-3
H7-17
(1:2)
H8-9
H7-14
H8-1
H8-5
H8-4
H8-7
H8-8
H8-6
H9-1
H9-2
H9-7
H9-9
H9-4
H9-5
H9-3

図版七


H9-6
H9-8
H9-10
H9-18
H9-17
H9-14
H9-19
H10-3
H10-2
H9-11
H10-1
H9-12
H9-15
H10-7
H9-13
H9-16
H10-4
H10-5
H10-8 (1:1)
H10-6
H11-1
Gr-1
Gr-2
H11-3
P2 (1:2)
H11-2

報告書抄録

ふりかな	いわむらだいせきぐん　にしようかまちいせきはち
書名	岩村田遺跡群　西八日町遺跡Ⅷ
副書名	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第251集
編著者名	冨沢　一明
編集機関	佐久市教育委員会　文化振興課
所在地	長野県佐久市中込2913　TEL0267-63-5321　FAX0267-63-5322
発行年月日	平成29年(2017)12月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
いわむらだいせきぐん にしようかまち いせきはち 岩村田遺跡群 西八日町遺跡Ⅷ	さくしいわむらだ 佐久市岩村田 2137-1　他	20217	52	36°15.57	138°28.37	20170410 ～ 20170420	302	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩村田遺跡群 西八日町遺跡Ⅷ	集落址	弥生～ 平安	住居址　11軒 掘立柱建物　1棟	土師器・須恵器 石器・鉄製品	

要　約	台地上に展開する古代の集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に弥生時代末～平安時代の竪穴住居が検出された。中でもH5号住居跡からは住居内に大量の礫が投げ込まれ、礫の下からは破砕した須恵器長頸壺が出土し、壁際からは「神」と墨書された土師器坏が出土し、祭祀的な行為が推測された。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第251集
岩村田遺跡群　西八日町遺跡Ⅷ
平成29年(2017)　12月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市中込3056
社会教育部　文化振興課　文化財事務所
〒385-0051　長野県佐久市中込2913
℡0267-63-5321
印刷所　キクハラインク有限会社